Report

もはや「アジア映画」にカギカッコは要らない

国際交流基金アジア映画ベストセレクションを終えて

高須奈緒美[国際交流基金芸術交流部映像出版課長(当時)]
Naomi Takasu

私の手許にひとつの古い新聞記事がある。「アジアに向かう若者の目」と題された1982年10月26日付の毎日新聞社説。国際交流基金主催映画祭「南アジアの名作を求めて」が取り上げられている。当時日本にほとんど紹介されていなかったインド、スリランカ、インドネシア、フィリピン、タイの映画11本を一挙上映し、会場は連日満員御礼、のちのアジア映画ブームの火付け役ともなった伝説の映画祭である。とはいえ、当時は終わったばかりで成果も定まっていない。普通なら到底報道されることのない、行く先のわからぬ文化現象の萌芽的状況を大胆に論じたという意味で、異例の社説であった。筆者はこれらの映画に表現された「自らの存在確認への燃えるような希求」、「古い文化と伝統、独立後の苦悩にみちた国づくり」を生きた世界として知ることで、アジアへの眼差しが「深いところで少しずつ変わってきた」日本の若者たちに、新たな社会の潮流を予感する。のちに筆者は回顧する。「若者たちの中で『アジア』という抽象的な概念が、映画を通じて生身の存在に変わり、「他者に向かって開かれつつあった青年たちの心に『アジア』がこのうえない清新さをもって流れ込んできた。[…] 私は、型破りの社説を書いた。それは、ひとえにヤクルトホールを取り巻く若者たちの発散する熱気と、南アジア映画祭に出品された作品に感動したためであった。言い換えれば、よい文化交流の仕事に打たれたためであった。」[01]

それから四半世紀余。若者の心に堰を切って流れ込んだ「アジア」はそれぞれに根を下ろし、枝葉を伸ばし、着実に実を結んでいる。国際交流基金はその後も、東南アジア映画祭、スリランカ映画祭等を継続して開催してきた。現在では、東京国際映画祭、東京フィルメックス、山形国際ドキュメンタリー映画祭、アジアフォーカス・福岡国際映画祭、大阪国際映画祭など、日本各地の主要な国際映画祭で恒常的にアジア映画特集や上映がなされるようになっている[02]。特定の作品の「東京プレミア」「大阪プレミア」「待望の再上映」に、映画ファンが待ってましたとばかりに押しかけることも珍しくない。「アジア」はいまや映画の世界の普通名詞、そのカギカッコはすでにはずれているといってよい。

21世紀のアジアの「いま」を、同時代に生きる私たちが「私たちのいま」として共有する。2009年3月の「国際交流基金アジア映画ベストセレクション」はこうしたコンセプトに基づき実施された。作品はいずれも2004年以降に製作され、現地で大きな反響のあったもの。現地の市民が映画館にこぞってでかけた話題の人気作ばかりである。私たちは『虹の兵士たち』の子どもの屈託ない笑顔に心洗われ、日々の生活の中のさまざまなできごとを子どもたちと一緒に笑い、悩み、感動し、涙する。「インドネシアから、かかる社会的格差をなくせ」とこぶしを振り上げたりしない。『細い目』は「多民族国家共生の道を示した」と評価されたが、ヤスミン監督は「あーら、あれはただの恋愛映画よ」と言い切った。私たちも、眉根を寄せて難しい意味を見出そうとせず、素直にオーキッドとジェイソンの恋愛のゆくえに一喜一憂する。『ナガボナール将軍2』の父の背中の哀愁をわが身、わが父と引き比べて嘆息し、『オーム・シャンティ・オーム』の破天荒な面白さとヒロインの美しさに息を呑む。人々の息遣いや心の動きは私たちの感性に自然に入り込むだろう。そしてそれらは、だからこそ厳然として「アジア」なのだ。

映画祭が開催された3月14・15日は、悪天候に加え、同時期フランスやオランダなどの映画祭が開催されていたにもかかわらず、いずれの回も満員であった。『虹の兵士たち』は開場前に立ち見席まで完売、床に座って見る人も大勢いた。『オーム・シャンティ・オーム』に至っては、チケット発売と同時にほぼ全席を売りつくし、立ち見でも入っていただけない盛況ぶり。「エンディング・ロール中、手拍子が鳴り止まず、コンサートのような熱気がボリウッドの映画愛を歌い上げていた」(『キネマ旬報』2009年4月下旬号)。毎回毎回、会場から楽しそうに出てくるお客さんを見送る瞬間が楽しみな2日間であった。

書物は「沈黙の外交官」であるといわれるが、映画もひとつの完成した作品としてその価値の判断を見る者の側にゆだねるという意味では、同じく「沈黙する者」といえる。しかしながら映画たちは、さんざん歌って踊って語りつくしたのちに、ようやく沈黙する。私たちは今回、この「外交官たち」と、いつかどこかで見たような懐かしさ、「ひととくらし」を見つめる視線のやわらかな暖かさ、生身の人間の営みを伝える言語を超えた映像の力を共有した。「日本」という舞台に結集したアジアの映画たちが、21世紀の私たちの「よい文化交流の仕事」を展開するという予感。カギカッコのはずれたアジア映画には、その無限の可能性がある。

•01…阿部汎克「国際交流事業におけるマスコミの役割」『文化交流の仕事』第4号所収、1988年、仕事研究会編より引用。

•02…今回の映画祭開催にあたっては、上映3作品に関し、アジアフォーカス・福岡国際映画祭、東京フィルメックスから字幕提供を受けたほか、両映画祭の梁木靖弘さん、市山尚三さん、東京国際映画祭の石坂健治さん、そして松岡環さんに多大なるご協力を頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。

2日間で1332人が来場。
立見もできないほどの満席の大盛況となった
『オーム・シャンティ・オーム』開映前のロビー